

歴史サークル5月例会を開催

5月15日(金) 29期生担当 15名が参加



【史跡案内コース】

近鉄飛鳥駅前広場



① 吉備姫王墓・猿石

<宮田 29期>



② 平田梅山古墳 (檜隈坂合陵、欽明天皇陵に治定)

<宮田 29期>



③ カナヅカ古墳

<宮田 29期>



④ 鬼の畑・雪隠古墳

<田原 27期・佐藤 27期>



⑤ 野口王墓古墳

(檜隈大内陵、天武持統天皇陵に治定)

<尾関 13期>



⑥ 野口王墓古墳前

解散

歴史ガイドは、29期生の担当で、新緑まぶしい今城谷王陵の史跡コース(写真上)を巡りました。

近鉄「飛鳥駅前」から国道169号線沿い(下ツ道)を北へ歩き、「榎龍神塚」・「みみなほし地藏尊」を経て、「吉備姫



吉備姫王墓にある四体の猿石、左から「女」「山王権現」「僧」「男」

王墓・猿石」をたずねました。

「女・山王権現・僧・男」を表す「猿石」は、吉備姫王墓の敷地内にあります。斉明朝に造られた石造物とされていますが、その用途については不明です。「猿石は現世と来世の結石を示す目印か、それとも道祖神として定着したものか、謎めています」と宮田さん。さらに、江戸時代・天



大田蜀山人が素描した「猿石」



石の道標

明期を代表する文人・狂歌師の大田蜀山人（おおた・しょくさんじん）＜本名：大田南畝 なんぼ＞が大和を旅したときに素描した、『猿石図』が紹介されました。また、12世紀に平田梅山古墳の南側（小字ツクエ、周濠と畑地辺り）から石造部物7体以上が



欽明天皇陵（檜隈坂合陵 ひのくまのさかあいのみささぎ）への案内を刻んだ石の道標を確認



平田梅山古墳（欽明天皇陵）

発見されてから今日までの、各時代の「猿石」の位置の変遷を史料で示しました。「戦後すぐ GHQ に接収されることを恐れて村民が地中に隠して難を免れた」というエピソードや、高取城の「猿石」、高取町・光永寺の「人頭石」、橘寺の「二面石」などに一部が拡散し現在に至っている」と説明。そのうえで、「明日香村平田の人々は毎年 11 月に“山王祭”を行うなど、子孫繁栄を願って大切に祀っています」と締めくくりました。

平田梅山古墳（宮内庁により欽明天皇陵に治定、古墳時代後期）は、霧ヶ峰と呼ばれている丘陵の南側斜面を大きく削平して墳丘が東西に主軸を置いて築かれており、明日香村では唯一の前方後円墳（墳丘長約 140m）です。

「今城谷王陵群における渡来人専門家集団による古墳造営と地形条件との関連性に着目してみると面白いことが分かります」とし、「“聖なるライン”と呼ばれる南北中軸線上（藤原宮～キトラ古墳）と、平田梅山古墳をはじめとする東西王陵群のラインとが、野口王墓古墳上において交差（クロス）していることが、著名な考古・歴史学者から提示されていますが、果たして偶然か、試算されたものかを想像するのはミステリアスというほかありません」と強調されました。そのうえで「考古学的な発掘調査が進んでいないので被葬者は明らかではありませんが、北西に約 800 m 離れて位置する五条野丸山古墳（橿原市、墳丘長 318m）が欽明陵ではないかと長らく議論されていました。地形的な視野から両古墳を比較・検証すると新たな視点が見えてきますので興味深い」と強調されました。

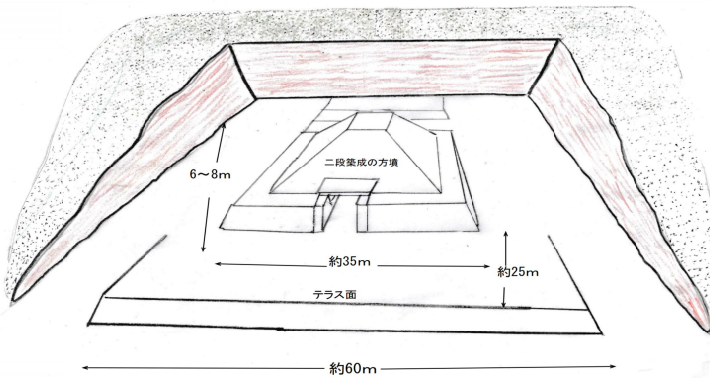


平田梅山古墳の南側の周濠から畑地の辺りから猿石が掘り出されたと解説がありました



カナヅカ古墳のテラス面辺りで解説

カナヅカ古墳 墳丘復元図



13 期尾関さんが原案作成

平田梅山古墳（欽明天皇陵）の陪塚（ばいちょう・ばいづか）とされている「カナヅカ古墳」（別名・平田岩屋古墳 7世紀中頃）に立ち寄りました。この古墳は今城谷王陵群の東西ラインのほぼ中央に位置します。一辺約 35 mの二段築成の方墳。墳丘は、丘陵の南側斜面を東西約 100 mの範囲をコの字形に削り込み、その中央に築かれています。この古墳も明治時代に破壊の危機に陥ったことがあります。大切な文化財を後世に残すべきだと地元有力者の尽力で救われたエピソード

を紹介。「南に開口する横穴式石室は、精緻な造りから西飛鳥真弓地区にある岩屋山古墳と同系で、石室の入口前にテラス面が設けられているなど、かなり高貴な身分の被葬者が想像されます。斉明・孝徳両天皇の母である吉備姫王の檜隈墓ではないかという説が有力視されています」と解説しました。



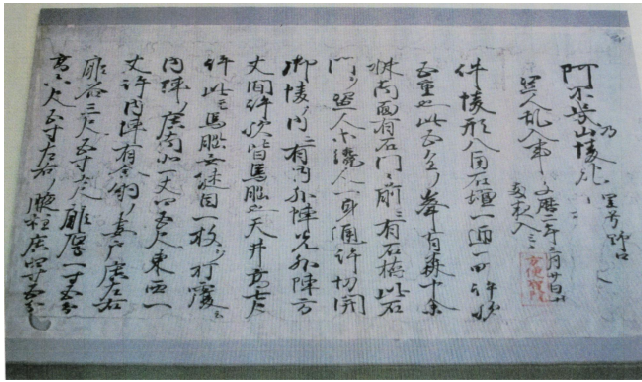
鬼の雪隠古墳で解説



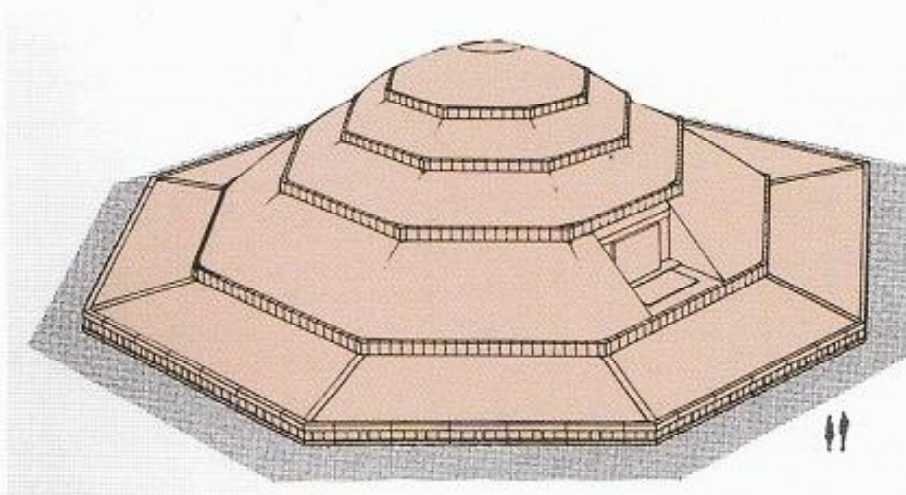
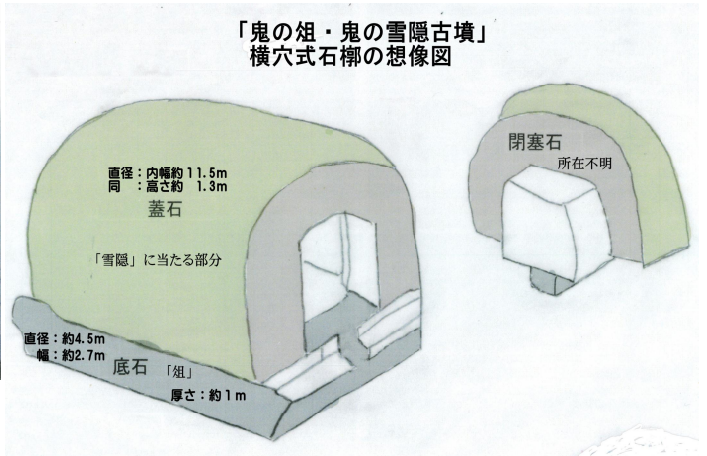
鬼の俎（上）と鬼の雪隠古墳本来は一体の横穴式石槨と推測されている

鬼の俎・鬼の雪隠古墳」は7世紀後半に築造された古墳で、欽明天皇陵の陪塚に治定されています。花崗岩の巨石

を削り抜き精巧に加工した底石・蓋石・扉石の3個の石を組み合わせた一体のもの。鬼の雪隠はその蓋石にあたり、上方にある鬼の俎（底石）から横転してきた状態にあります。ガイドの田原さんは「鬼の雪隠は墳丘土を失った終末期古墳（7世紀後半）の横穴式石槨の一部、奈良県生駒郡斑鳩町にある竜田御坊山3号墳と同じ構造をしており、現在は橿原考古学研究所博物館で屋外展示されています」とし、「石槨の内方は長さ約 2.8 m、幅約 1.5 m、高さ約 1.3 mを計り、古墳築造の簡素化・小規模化を定めた大化薄葬令（646年）の規定に準じています」との解説がありました。



阿不幾乃山陵記



墳丘復元図

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『飛鳥の古墳』より

最後は野口王墓古墳。「檜隈大内陵（ひのくまのおおうちのみささぎ）」として天武・持統天皇の陵に治定されています。石を積み上げた5段築成（上3段、下2段）、墳丘は東西約58m、南北約45mの「八角墳」。これまで様々な被葬者が論じられてきました。明治時



野口王墓古墳（天武持統天皇陵）でガイド

代に発見された『阿不幾乃山陵記』（あふきのさんりょうき：1235年（文暦2年）に起こった天武・持統合葬陵の盗掘を記した検分録）の記述から「天武・持統天皇陵」であることが確定的になりました。それを見ると、石室内の様子や夾紵棺（きょうちよかん）、遺骨、副葬品の状況が詳しく記されていました。

ガイドの尾関さんは「飛鳥時代の古墳で、夫婦で埋葬されているのほとんど例がないのでは」としたうえで、殯（もがり）のときに鵜野讚良皇后（う

ののさららのおおきさき、後の持統天皇）が夫・天武天皇の崩御を悼んで詠んだ万葉歌（巻第2-159）を引き、「歌の内容からも夫を慕う妻の愛が感じられます。夫婦愛を感じました」と感想を述べました。



平田梅山古墳（檜隈坂合陵）で集合写真

（文・図版作成：27期佐藤 写真撮影・提供：16期佐々木）